



みの EDO

東京⇄笠原情報誌 MAIL版

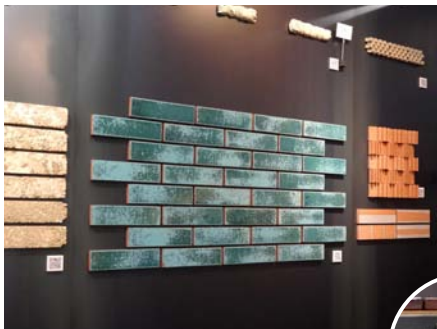
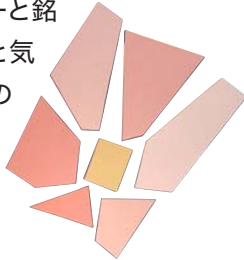
タイル×京都

前編

京都でみつけた話題を
2号にわたって紹介

作り手の顔が見えるタイルを紹介 —タイルギャラリー京都の試み

2019年7月、京都駅近くにオープンした「タイルギャラリー京都」。積極的な宣伝はしていないというものの、すでにタイル好きにも知られた存在となっている。一方で「どこが運営しているの?」「ギャラリーと銘打っているのはなぜ?」と気になることも多い。代表の山下暁彦さんに、設立の経緯やその意図するところを伺った。



それぞれのタイルの情報は、QRコードから得る仕組み。それゆえ空間はシンプルで、タイルそのものをじっくり見ることができる。



静かすぎではかえって落ち着かないと考え、タイルをテーマとしたイメージ映像と音楽が流れる。映像を映す画面にも大判タイルを用いている。



代表・山下暁彦さん。「アート系の方も面白いと言ってくれます。わざわざ見学に来るタイル好きな一般の方が結構いることに驚きました」

京都駅から徒歩5分ほど。コクリート打ち放しのモダンなビルは、植栽を施した落ち着いた佇まい。下の階にはまちづくり系の出版社が入り、タイルギャラリー京都があるのは3階。展示空間は80㎡ほど、黒を基調とした壁面がタイルの色形を際立たせる。「窯元を紹介する」というコンセプトの元、展示しているのは約20カ所の窯元が作った国産タイルだ。運営元は一般社団法人マイスターというタイルの施工会社の団体で、ギャラリーの代表を務める山下暁彦さんも元はタイル職人。「職人さんがタイルギャラリーを設立」とは少々異色。その背景にはタイル業界に対する危機感があった。

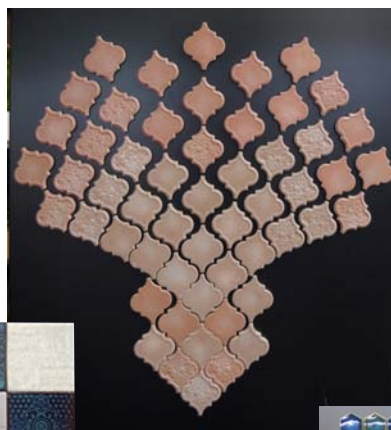
●職人だけじゃない、工場も、設計者も

元々ぼくはタイル工事屋ですから、職人の仕事を確保したかったんです。また、若手職人がなかなか入らない。そのうち、「職人だけじゃない、工場も元気じゃないとアカン。設計者もタイルを知らない」と気づいて。3方向とも盛り上げないとタイル業界が続かないと思ったのです。

おりしも京都にはリクシルしかタイルのショールームがない。でも住設がメイン。ほかのタイルを探す人は大阪まで行く必要がある。「京都にショールームがあったら便利」という声は聞か、作る計画があるとは聞こえてこない。じゃあ自分が作ってみよう…が始まりです。



様
々
な
形
の
タ
イル
が
揃
っ
て
ま
す



模様替えをしやすいように、
タイルの展示には
マグネットを使用。



最初はすべての商社のタイルが見られるショールームにしようと思いました。でも「窯元さんを紹介します」としたほうが面白いかなと。道の駅などで「この玉ねぎは私が作りました」と出すように、作り手が見えるタイルを紹介するというイメージです。

ショールームで見られるのはその商社が扱う商品に限られるが、ここにはそうした「壁」はない。試作品や特注タイルも並ぶ。画期的ともいえる取り組みだが、窯元に出展を依頼しても、なかなか協力を得られなかったという。

●オープンまでの苦労

最初は出展料をもらうことも考えましたが、それでは参加してくれないだろうと無料にしたら逆効果で。「どうやって運営するのか」と怪しまれ、理解を得られるまで時間がかかりました。一方で協力してくれる人もいて、着々と準備し、見切り発車で昨年7月にオープン。好意的な窯元さんが知りあいの窯元さんを紹介してくれ、説明に伺って賛同者を増やしています。「展示するタイルはどう選んでいるのか」とよく聞かれますが、たまたま知りあって協力してくれた窯元さんというわけです。

ギャラリーなのでタイルの販売はしていません。このタイルがほしいと言われた場合、商社か、自社か、どこを通して購入してもらうかは、窯元さんにお任せしています。

販売はせず、施工業者についても必要なら紹介するというスタンス。一方で運営には賃貸料などの経費はかかるが、それ以上に得るものは大きいと話す。

●学生と窯元の見学へ

職人はタイルを買う際に商社とは関わりがありますが、窯元さんと話す機会はずりありません。設計事務所に営業しようにもなかなか会ってもらえない。今はそうした人たちともつながりができました。

大学の建築学科の先生に頼まれ、学生を前にタイルの話をしたことも。先日は学生たちと窯元の見学へ。興味津々だったので自らデザインしてタイルを作ることを提案しました。ただし、製作の過程をSNSで上げ、売るまでをやらせる。社会に出る際に、そういうことを経験していると全然違うよ、と。今度は3つの大学の学生で協力して何かをやるかと盛り上がっています。

とはいえ、大方の学生はタイルに興味がないのです。でもそういう学生にもアプローチする必要があります。彼らは10年後には仕事場で主力となります。そのときどんなタイルがあるといいかを考えてもらいました。それが面白くて、そもそもタイルじゃないものもある(笑)。ぼくらは頭ががちこちになっている、柔軟な発想が必要だと思い知らされました。

学生たちと同様、世間一般でもタイルの魅力は知られず、ネガティブな情報が伝わっている。「設計者がタイルを知らない」と再認識しました。施主さんにタイルを提案するはずがないですよね。しかし、中には興味をもつ設計者もいると実感している。

●建築家が好むタイル

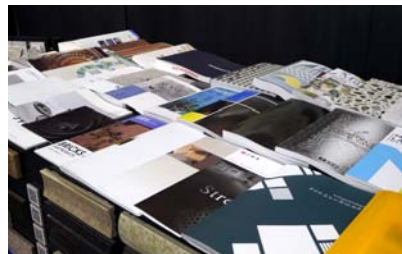
同じビルに入る出版社の方が紹介してくれ、建築家とも知りあうようになりました。コンクリート打ち放しのビルや、木の素材感を活かした建物を設計する人はタイルを使わない。でもぼくがタイルについて話すと、「タイルもいいな」と思ってもらえます。

そういう建築家は手作り感のあるタイルやオリジナルのタイルを求めることが多い。ところが、「カタログから選ばないといけない」「オリジナルを作れてもかなり費用がかかる」と思い込んでいます。「相談次第で可能ですよ」と伝えると、「そんなことができるの」と驚かれます。



職人さんだけあって、山下さん自ら施工し、目地に工夫したタイルも。

タイルの張り板や鑄込みの型なども展示している。



窯元のカatalogを揃える。



タイルギャラリー京都

〒600-8216
京都市下京区木津屋橋通西洞院東
入学芸出版社ビル3階

開館日：火曜日・水曜日・木曜日
(それ以外の日に利用を希望する際は、
事前予約が必要)

開館時間：10:30～17:30

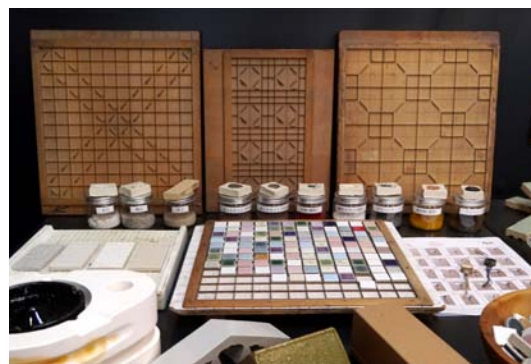
今は大規模な建築に使う大量生産のタイルに製作も販売も重きが置かれがち。「オリジナルのもの、大量生産のもの、いろんな窯元がいろんなタイルを作っているほうが面白いですよね」。多様なタイルを生み出すきっかけを作ることもこの意義と言えそうだ。

●タイルの選びの相談窓口

「こんなタイルを作りたい」「こんな物を焼き物で作りたい」という要望があれば、イメージに合った窯元さんをご紹介します。ギャラリーなので「商品を買わないといけない」というプレッシャーありません。じっくり話をし、アイデアのヒントにもらい、この場所を便利だと思ってもらえたら。タイル選びの相談窓口になることが理想です。

自分のできることを自分なりに見つけ、賛同者と共にいろんな人を巻き込んでいきたいと思っています。

「これはぼくの中では実験なんです。こんなことしたら世の中がどう反応するかなって」と山下さんは笑う。すでに新しい取り組みが生まれ、ここを介していくつかの施工物件も成立している。今後の展開に注目していきたい。



京都駅から徒歩5分。
観光のついでにも立ち寄れる立地。

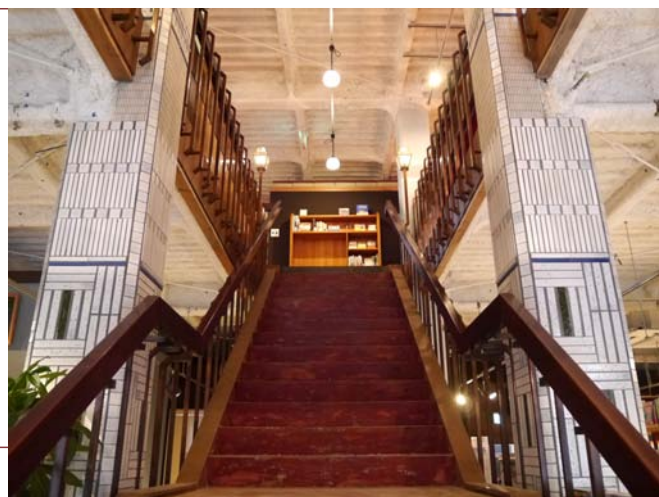
タイルも
たくさん!

トピックス

from多治見

情報と人が集まる 多治見の新たな拠点 「ヒラクビル」

多治見駅(岐阜県)から5分ほどの場所にあるレトロな佇まいの「ヒラクビル」。書店やカフェなどを併設した複合施設で、オープンしてもうすぐ一年となる。設立の経緯や今後の展開について伺った。



中央に鎮座する階段。天井にはシャンデリアが下がり、高級店だった往時の面影を伝える。両脇の柱には新たにタイルを張った。



「喫茶わに」

書店で売られている本を読むこともできる。珈琲やケーキのほか、スープやサラダ、アルコールのメニューもそろえる。



「ひらく本屋 東文堂本店」

入り口付近にタイルや陶磁器関係の本をディスプレイ。二階には参考書も揃える。「来るたびに違う本と出合える本屋さんにしたいです」(田平さん)。親子用の絵本スペースも設けている。

ちょっと
ティータイム



日が暮れて静かな商店街を歩いていくと、あたたかな照明の光が見え、思わずほっとした。外壁には茶色のタイルが張られ、「ヒラクビル」は懐かしい佇まい。

そのはず、この建物は「ワタナベ時計店」として長年地元の人に親しまれてきた。お店は2013年に閉店、その後リノベーションし、2019年3月に「ヒラクビル」として蘇った。一階には「ひらく本屋 東文堂本店」と「喫茶わに」、二階には同書店、およびシェアオフィスとレンタルキッチンが入る。「商店街のほぼ真ん中に位置するので、まちのことを発信する拠点、人が集まれる場所にしたいと思いました」と、運営元である多治見まちづくり会社の田平沙織さん。その理念は「ヒラクビル」という名称にも込められている。「ここからまちがひらかれていく。目をひらく、口をひらく、花ひらく…というんな意味があります」。



訪れた11月は「日本のタイル作家展 17人展」(3ページ参照)を開催中。「喫茶わに」は、全国から集まったタイルの作品で彩られた。作品を鑑賞する人もいれば、珈琲を片手に本を読んだり、おしゃべりしたりする人も。まちにしっかり根付いていることが伺われる。今後の展開について田平さんに聞いた。

「この場所の使い方について、まだ知られていない面もあるので、イベントを開催してもっと多くの人に来てもらいたいですし、レンタルルームも使ってほしいですね。活動に共感してくれる人が少しずつでも集まって、続けていければと思います」。より開かれた場所へと変化していきそうだ。



二階にあるタイルが張られた書棚はワークショップにより制作。
おすすめの本が展示されている。

ヒラクビルで見つけた！
様々なタイル装飾



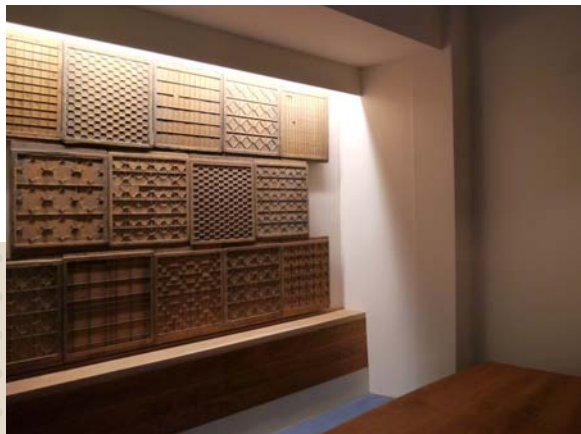
厨房にはブルーのタイル。



「喫茶わに」のカウンターには「guse ars」*のタイルが張られている。



リノベーション以前から張られていたタイルも。
レンタルキッチン(上)。
トイレ(左)。



レンタルルームにはモザイクタイルの張り板が飾られていた。

*guse ars(グセアルス):
陶磁器のかけらを使って、新たな模様を創作する2人組のアーティスト。2019年に多治見市モザイクタイルミュージアムにて特別展を開催した。



構想を含めてオープンまでに3年を費やした。

ヒラクビル

多治見市本町3-25

営業時間 10:00~21:00

定休日 水曜日



ビルは築45年。「ヒラクビル」オープン時にはこの建物にまつわる思い出を募集。「ここで結婚指輪を買った」「お店で接客していた人と結婚した」など、多くのエピソードが寄せられたという。

日本のタイル作家 17 展

～新しいタイル芸術の世界へ～

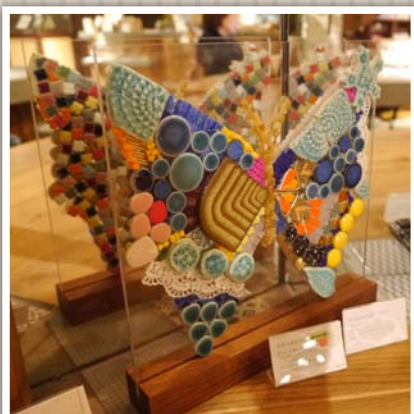
2019年10月19日～11月30日、ヒラクビル一階「喫茶わに」にて「日本のタイル作家 17人展」を開催。書店を併設するこの空間に合わせ、本に着想を得たものをメインに、24点の作品が空間を彩った。うち7点の作品を紹介。



作品は「喫茶わに」の棚やテーブルの上に展示された。

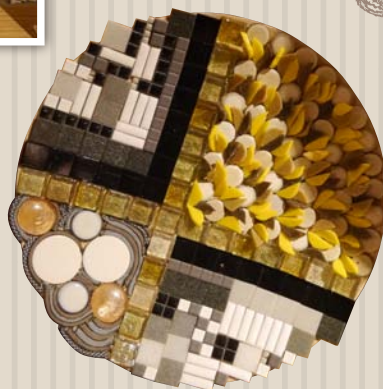


「Shiny days」中村あきこ
中心部に多治見のタイル、星形のアメリカンタイル、メキシカンタイルを使用。



「Flying Butterfly」中村ジュンコ
美濃焼タイル、ガラスタイル、自作のタイルを使用。

「天使が選んだもの」(幸福の王子より)
komorebi



「the plate」
佐藤美樹



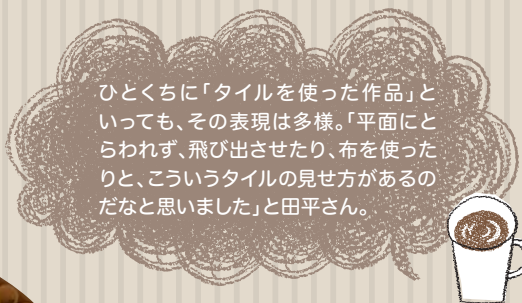
「世界は変化する」
(葉っぱのフレディより)
阿部信子



「パリのカフェにて」
KEIKO



「土と炎の街 多治見」
シロフォン そのだなおこ
昭和～大正時代の
多治見のタイルで制作。



ひとくちに「タイルを使った作品」といっても、その表現は多様。「平面にとらわれず、飛び出させたり、布を使ったりと、こういうタイルの見せ方があるのだなと思いました」と田平さん。

